

尻屋磯根資源調査 (要約)

高橋 進吾

目 的

尻屋地先の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

材料および方法

平成18年6月6日、太平洋に面する尻屋地先に15調査線を設け、各々の水深2.5m、5m、10m、15m、20mにある計71調査点に潜水し、海藻を50cmまたは1m四方の枠で1枠分、底棲動物を1m四方2枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。

調査線1、4、7、9、13、14から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計106個については、生殖腺重量を測定し身入りを求めた。

結果および考察

2年目マコンブ

2年目マコンブは、前年より高い密度で生育し、調査点平均では8.2本/m²となり、前々年の約2倍となった。水深別にみると、10m以深では皆無となったが、2.5m、5mで20本/m²前後と多かった。ここ10ヶ年では平成9年に次ぐ良い結果となり、今漁期のコンブ漁は前々年以上と考えられた。

1年目マコンブ

1年目マコンブは、前年より高い密度で生育し、調査点平均では153.6本/m²となり、前年の約9倍となった。水深別にみると、2.5m、5mで360本/m²前後と多く、10mで90本/m²、15m、20mで各々2、5本/m²となった。海域別では北部の方で多い傾向がみられた。昭和59年の調査以降最も高い値となり、来年の2年目マコンブは好漁が期待された。

キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全体の80%に相当する57地点から採取され、平均の生息密度が2.9個/m²、現存量が270g/m²となった。調査点全体の86%から平均2.3個/m²、311g/m²の生息が確認された前年に比べ、個数は28%増加したものの、重量は13%減少した。ここ10年間の平均密度(2.2個/m²、327g/m²)には大きな変化がなく、依然高い密度で生息する状況が続いている。またキタムラサキウニは、100g/m²以上の密度で生息する場合、環境条件によってはマコンブが発生・生育しにくくなることが知られている。キタムラサキウニの食害による磯焼けの発生・持続が懸念されるため、引き続き、その生息状況を注視するとともに、漁獲等により適切な密度管理を考慮する必要がある。

発表誌：平成18年度尻屋磯根資源調査結果報告書。青森県水産総合研究センター増養殖研究所，平成18年7月。